

ウマ娘 スーパージョッキー

グリグリハンマー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてあの「天才」と称された名ジョッキーと肩を並べる存在となり、日本を代表するジョッキーの1人だった男がいた。ありとあらゆるサラブレッドを、ありとあらゆるレースを勝利へと導き、名馬へと駆け上がらせた。

そして、馬と共に駆け抜けた人生に終止符を打った。

ウマ娘プリティーダービーの二次創作作品です。オリ主及びオリジナルウマ娘が登場します（予定）。ウマ娘同士のイチヤイチャモノが読みたいという方は、ブラウザバックでお願いします。

目次

1. プロローグ	1
2. ウマ娘とは何ぞやねん	5
3. 世間知らずで申し訳ない	9
4. キツカケなんて些細なもの	13

1. プロローグ

騎手を目指したのは、恐らく同じ年の幼馴染みが原因だったと思う。子供の頃、よく乗馬クラブにその幼馴染みの父親と一緒に遊びにいった。その父親は現役バリバリの騎手で、幼いながらに馬に跨がる姿がカッコいいとか思ってたのは覚えている。

そして幼馴染み……は、後に数十年に渡って共に日本競馬を席卷していく存在となる男となる人物だった。彼の父親は「名人」と称された騎手だった。

アイツは子供の頃から天才としての片鱗を見せていた。小学生とは思えないスマートな騎乗姿、馬に対する考え、どれも小学生離れしており、俺はアイツの言っていることが殆ど分からなかった。

でも、そんなアイツに触発されて俺も乗馬を始め、騎手を目指す為に中学卒業後に、アイツと一緒に競馬学校へ入学した。競馬学校内でもアイツは一目置かれる存在となり、1つ上の先輩や同期も、アイツの存在に脅威と尊敬の念を抱いていた。

この頃からだろうか、俺はアイツの幼馴染みというだけで、他には何も無いのではと少し自信を失った。

嫉妬もした、でも俺は俺だと思い直して、がむしやらに技術を磨いていった。

競馬学校を卒業し、1年目から華々しくデビューしたアイツに対し、俺は華々しくとまでは行かなかった。勝ち星はアイツが69勝挙げたのに対して、俺は半分の35勝しか挙げられなかった。それでも重賞勝利はアイツよりも1ヶ月早く勝利出来たし、そういう面では華々しかったと思うし、俺はアイツの幼馴染みであり、ライバルにもなつてやると勝利に対して貪欲になった1年目だったと思う。

しかしどれだけ勝利に貪欲になつても、どれだけ素晴らしい騎乗をしても、アイツのライバルになることは出来なかった。アイツのライバルは、今も昔も自分自身以外いないのだ。

アイツが1年の半分くらい海外遠征にいった2001年を除き、1992年〜2006年までの15年間、リーディング2位14回とい

うのが、アイツに追い付けなかったことを物語っている。中でもアイツと共に史上初のシーズン200勝を達成した2003年、1勝差でリーディング1位を逃したのは痛かった。

アイツより先にダービージョッキーとなり、史上初の牡馬牝馬両方の三冠ジョッキーにもなり、日本国外のレースも勝利し、通算GI勝利数は50を超えた。世間はアイツのライバルと認めてくれたが、それでもアイツは俺をライバルとは認めてくれなかった。

世間が俺がアイツを超えたと言ったのは、俺が初めてリーディング1位を獲った2010年。でも俺は全く納得していなかった。この年、アイツは落馬負傷で半年くらい騎乗しておらず、棚ぼたみたいな形で俺がリーディング1位になったに過ぎなかったからだ。

もうこの頃には若い時みたいなのが競馬に対しての情熱は失われつつあり、引退のタイミングも計っていた。だがアイツより先には辞めたくないとは思っていたけど。何でって、不戦敗みたいで嫌だったから。只でさえフツーに戦って負けてんのに。

東京でオリンピックが56年ぶりに開催された次の年、アイツは引退という選択を取った。世間に発表される前に、2人で飯食ってる時、俺にそれを話してきた。

別に驚かなかった。むしろやっぱり俺達は幼馴染みなんだなあとか思ってた。

だって俺も、その場で引退することをアイツに伝えようと思っただから。

アイツもそれを分かっていたみたいで、お前も辞めるんだろ？なんて聞いてきた時には、思いつき爆笑した記憶がある。

ただ俺が予想出来なかったのは、騎手を辞めた後のことだった。俺はてつきり調教師か競馬評論家にもなるんだろうと思っていた。俺やアイツよりも何年も前からトップジョッキーとして活躍していた騎手達何人かは調教師や競馬評論家になっていたからだ。

でもアイツはそのどちらになるでもなく、日本競馬界から姿を消してしまった。それこそ後輩に1人、調教師でも評論家でもなく北海道かどっかでバーでもやってるのがいるけど、どう考えてもアイツの

キャラじゃないし、それだったらフツー周りにそのことを話している筈だ。

アイツのいなくなった競馬業界には何も無いように思えてしまった俺だったが、いつかアイツに会ったとき、恥ずかしい自分を見られたくないと思い、調教師として多くの馬を手掛けた。

後で知ったことだが、引退する前から日本競馬に対して魅力を感じなくなったアイツは、海外へ移住し、海外で調教師になっていた。俺が育てた馬と、アイツの育てた馬が同じレースに出ることは無かったが、ブリーダーズカップ・ワールド・チャンピオンシップに出席した時、十数年ぶりにアイツに会った。殆ど会話しなかったが、海外でアイツは十分調教師として認められていたようだった。

そして――。

俺、鶴崎忍はその生涯を閉じた。結局アイツには1度も勝てなかったし肩を並ぶことも出来なかったが、悔いはない。これが俺だったんだろう。

さて、人は亡くなつてから再び生を与えられる時、記憶を残したまま生を与えられることがあると聞く。所謂、前世の記憶があるというやつだ。そして俺は赤ん坊ながら、こうして自我が芽生えている。唐突な自分語りは、実はこの赤ん坊の姿で語っていたのですよハッハッハ。

いやごめん。俺もよく分かっていない。とりあえず俺はまたこうして生まれ変わったということなんだろう。まさかの2度目の人生、今度は何をしようかな。というか、この世界に競馬というものはあるんだらうか。まあいいか、今はただ寝させてもらおう。赤ん坊だし。そんなこんなで幼少期を過ごし、無事に成長した俺は、競馬だけど競馬ではないものを知る。

ウマ娘って何ぞ？

え、騎手は？ これ人じゃないの？ あ、だからウマ娘なのか。いやいやこれただの陸上競技じゃん。何このゲートに自分から入っていくシユールさ。

でも……名前はみんな聞いたことがある。年度代表馬になった馬、

記録より記憶に残るようなクセ馬、予後不良となった馬。俺が乗ったことのある馬もいた。

……決めた。

2度目の人生、俺はこのウマ娘に関わることをやろう。騎手目線、調教師目線で1つでも多くのウマ娘をGIレースの勝利へ導こう。この場合、調教師になるのかな？ いやでも見た目人間な娘に調教つて……響きがエロいなおい。

2. ウマ娘とは何ぞやねん

この世界ではサラブレッドという存在はいないようだ。その代わりにウマ娘という馬を擬人化したような女の子達がいる。どう見てもアイドルやってそうな服着てるけど、レースが始まったらどの娘もすげー真剣に走ってた。

で、レースの1〜3着のウマ娘達で、ウイニングランならぬウイニングライブを行うらしい。いや、2着と3着は負けてるんだからウイニングじゃないじゃん。しかもこれ同着とかだったらどうすんだよ。でもレースは俺が元いた世界と同じ内容で、行われる時期も一緒のようだ。

年齢とかそういうのはバラバラみたいだけど。だってシンボリルドルフとスペシャルウィークとか、元いた世界じゃ10以上歳が離れてるのに、ウマ娘だったら殆ど変わらないくらいの歳の差だし。

それで日本一を決めるのに、「トウインクル・シリーズ」とかいいうレースに出るらしい。トウインクルって何ぞやねん、大井競馬場のナイトレースじゃあるまいし。馬にもトウインクルって馬いたけどさ。

まあ、元いた世界とはあれこれ変わってることが多いけど、これはこれで目指すものは多そうだ。

無事に学校を卒業し、トレーナー課程やら研修やらを終えて、俺はトレセン学園のトレーナーとして配属された。競馬知識はあっても、学力は中学で止まっているので、勉強するのが大変だった。平たく言えばバカなんですよ、俺。

見習いとは言え、トレーナーはトレーナー。俺は早速自分が受け持つチーム「アルタイル」のメンバーに会いに行くことにした。

チーム「アルタイル」は結成されて間もないチームで、他と比べても大体中の上といったところらしい。まあ俺からすれば、チームの度合いはどちらでもいいので、どんなウマ娘がいるのかが気になるところ。

「あなたが新しく配属されたトレーナーですね。私はアドマイヤムーンと申します。宜しくお願い致します」

「どもー、スリープレスナイトって言いますー……あふう……宜しく
ですー……ふわぁ」

「期待してるぜトレーナー！ 私はディープスカイだ、宜しくな！」
「ブエナビスタと言います！ トレーナーさん、宜しく願います
！」

はえー……みんなGIホースばかりじゃん。これだけ集まっても「リギル」や「スピカ」ってチームに敵わないってことは、その2
チームにはもつと強たくさんのウマ娘がいるってことなんだろう。

「俺は鶴崎忍。呼び方はテキトーに何でもいいよ。堅苦しいのは好き
じゃないから、敬語も無くていい。これから宜しく」

無難に自己紹介を済ませ、恐らくこのチームのリーダー的存在である
アドマイヤムーンから、チーム「アルタイル」についてご教授いた
だく。

「前任者が急な転勤となってしまうして、後任の方がなかなか決ま
らなかったのですが、こうして配属になっていただいてほつとしてお
ります」

「そんな人手不足なのここ……というか敬語じゃなくても良いんだよ
？」

「いいえ、私のトレーナーですもの。敬意を持つてお話しさせていただ
きますわ。ですが、その敬意に見合う御方でないと判断した次第、そ
れ相応の対応を致しますので……」

え、怖いよこの娘。おしとやかで凄いい良い娘かと思ったらめちやく
ちや怖いよ。

「お、おう……そうならないように頑張ります……」

俺が敬語になっちゃったよ。

「チームの事情はこんなところでしょうか。トレーナーさん、何かご
質問はございますか？」

「来たばかりだからなあ、質問したい内容が分からない。少しずつ慣
れていくことにするよ」

「分かりました。それではトレーニングの方針を決めていただけま
すか？」

前世での調教師時代、その時の俺の方針は、本番を見据えてのレースは基本的に緩め調教だった。だからといってGI出走時でもスパルタ調教は殆どすることはなく、強めの調教を長めのスパンで行うことが多かった。

もちろん、馬主から渾身の仕上げを依頼された時は、スパルタ調教も行っていたが、そういつた依頼が無ければ、俺は「無事ぶじ是名馬これいば」をモットーに掲げる調教師だった。

つまり、前任のトレーナーが決めた、メンバーそれぞれの次走によつて、俺のトレーニングの方針は変わるということだ。

……未だにこのトレーニングって言い方が慣れない。調教って言いそうになる……。

「その前に、全員の次走を聞いていいか？」

「はい。2月の京都記念を予定しております」

と、ムーン。

「えつとー3月の500万下ですー……あふう」

と、スリープ。

「私は4月の大阪杯だ」

と、スカイ。

「私はまだデビューが決まっていません……」

と、ブエナ。

やっぱり時代が違っているな。ムーンとスカイと一緒に走ることは無かったが、この世界ではそれが有り得る。これは夢の共演がたくさん見られそうだ。

「ムーン、君は2月に入るまでは自主トレに励むこと。ただし1日1時間まで、週に3日以上休むこと。2月から本格的に身体を絞っていく」

「に、2月から？ それで間に合うんですか？」

「ああ、間に合う。次にスリープ、2月から少しずつトレーニングの量を増やしていく。いきなり激しいトレーニングをすると、身体に負担がかかるからな」

「ふわあ……分かりましたー」

「スカイは今のうちに目一杯リフレッシュしとけ。2月は軽めに、3月からは強めにトレーニングをしていく」

「おっしやあ！ 休みだあ！」

「ブエナは、後で今までやってきたトレーニングの内容を教えてください」
「はい！」

さてさて、元いた世界通りにはいかないだろうし、どんなレースになるのか、どんなレースを見せてくれるのか今から楽しみだ。

長らく、こんな風を楽しむことを忘れていたような気がする。競馬とはまた違うんだろうけど、やっぱり好きだからこの業界に入ったんだし、楽しまなきゃ損なんだよな。

しかもこの世界だと、見た目めちやくちや美少女な娘ばかりだから、目の保養って意味でも最高。男社会だとむさ苦しいったらありやしない。

「トレーナーさん……顔が怖いです」

「あ、ごめん……」

3. 世間知らずで申し訳ない

ブエナ以外のウマ娘達は、これまで何度もレースやトレーニングを経て来ているので、ある程度自主性に任せても大丈夫だろう。

しかしブエナはまだデビューすらしていない。なので、今の内にトレーニングのやり方や体調管理、調整方法などを教えていこうと思う。そしてその代わりと言っちゃなんだが、この世界について教えて貰えれば何とかなる筈。

「今のところ、ヨレたりとかコーナリングのトレーニング十分出来るみたいだな」

「はい。走るときに変な癖が付かないようにって、前のトレーナーさんが色々教えてくれたよ」

「だったら後は、レースを有利に進められるようにする為のトレーニングだな。このトレーニング結果を見る限り、スピードは天性のものがあるみたいだし、鼻目無しで考えてもなかなかのものだ」

「本当!? ありがとうございますっ!」

そりやそうだろ。なんと言っても年度代表馬にもなった程の馬が元になってるんだし。トレーニングの進め方次第では、元の世界より強くなれるかもしれない。今から楽しみだ。

ブエナには、後ろからのレース展開は間違いなくものに出てくるので、自在性を身に付ける為にスタートの練習と、前目でレースが出来るように粘り腰を身に付ける練習をこなしてもらった。そしてトレーニング終了後、ブエナから「リギル」とか「スピカ」とかのチーム事情を更に詳しく教えて貰った。

とりあえずウマ娘というものを知る上で、この2チームのことを知らないのはあり得ないことらしい。大きなレースになればなる程、この2チームに所属しているウマ娘が上位を争い、一時期のウイニングライブはリギルとスピカのウマ娘ばかりだったとか。

「私が言うのもなんだけどさ……トレーナーさんって結構世間知らずだったり?」

「やめて!」

だってしようがないじゃないか！ 前の世界ではあり得なかったことがこの世界では当たり前になってるんだから。それに、俺が興味を持っているのはウマ娘自身であって、チームとかライブとかそういうことにはてんで興味が湧かない。

まあ、トレーナーを続けていく内に色々と慣れてくるんだろう。今は自分のチームのウマ娘達が、きちんとレースで結果を残せるようにバックアップしていただくだけだ。

つか、何だかんだみんな良い娘で本当ありがたい。着任してすぐの俺の言葉をあれこれ聞き入れてくれるとは、正直思ってたなかったし。絶対反抗されると思ってたから、こればかりはただただ意外である。いや、反抗してほしい訳じゃないけどさ。

2月、ムーンの復帰初戦である京都記念当日。真面目な委員長タイプのムーン、俺が言ったトレーニング内容にやや不満を抱きながらも、ちゃんとその通りに行ってくれた。

「鶴崎トレーナーのことを信じていない訳ではございませんが……本当にあのようなトレーニングで大丈夫だったのでしょか」

「大丈夫大丈夫。ムーン、お前が思っている以上に実力はハッキリしている。だから安心して、いつも通りに走ってこい」

「分かりましたわ」

この相手関係で負けるようなら、もちろんそれまでの実力ってことだが、それだと去年1年間クラシック路線を戦える訳がない。

「アドマイヤムーン先頭でゴール！ 復帰初戦を見事勝利で飾りました！」

「とても強い勝ち方でした。これまでの後方からのレースではなく、中団よりも前に位置取っての展開が上手くハマりましたね」

結果として、ムーンは危なげなく勝利を収めた。いやまあそれは良いんだけどさ、何であの人が解説やってんの？ この世界に転生したの、俺だけじゃなかったの？ ずっとそればかり気になって、あんまりレース見てなかったんだけど。

「鶴崎トレーナー！」

「おおムーン。見事な勝ちっぷりだったな」

「今までとは違うレースの方法を教えてくださいました鶴崎トレーナーの
陰ですわ」

「謙遜すんな。勝ったのはムーンの実力だ」

「そんな……もったいないお言葉ですわ」

うっわ、普段強気なお嬢様キャラの赤面とか可愛過ぎる。ヤバイ、
これだけでご飯3杯食えるし、トレーナーになった甲斐もあつたつて
もんだ。

「本当にありがとうございます。それと、トレーニング内容を疑うよ
うな言動を取ってしまったことをお詫び致しますわ」

「気にしなくて良いってのに……ああもう！　ムーンは可愛いなあ
！」

「ち、ちよつと！」

我慢出来なくなり、思わず頭をわしやわしやと撫で回しつつ、思い
切り抱き締めてしまった。身体の柔らかさとか人間そのものじゃん、
これ。

「い、いい加減にして下さい！」

「げふう」

ピンタされました。

「トレーナー、ムーンの奴すげー顔真っ赤だったけど何やらかしたん
だ？」

「何もねえよ」

「じゃあトレーナーの右頬に紅葉が咲いてるのは？」

「何もねえよ！」

結局ウイニングライブが終わってからムーンの機嫌が直ること
はなく、他のチームメンバーからの質問をひたすら躲す羽目になっ
た。

でも顔を赤くしながらのムーンのウイニングライブは、反則級に可
愛かった。多分今日のライブで更にファンが増えたに違いない。

「ムーンのこととはともかく、次はスリープ、お前の番だ」

「おお〜」

「なーんか気の抜ける感じだけど、こいつ本当に大丈夫なのかトレー

ナー？」

「普段は普段、レースはレース。切り替えがちやんと出来るのなら、俺は何も言わんよ。それが出来ない場合は、もちろんそれ相応の扱いをさせてもらうがな」

「……」

「スリープさん、黙っちゃったよ」

むしろそういう感じに持っていける方が、こっちとしては役得だから男冥利に尽きるって感じなんだけどな。へっへっへ。

「おいトレーナー。人様に見せられないような顔してっぞ」

「へい」

4. キツカケなんて些細なもの

「おいスリープ！ 寝てないで早く走ろうぜ！」

「……ええ、まだ走るのおく？」

「まだって、お前トラック2周ランニングしただけじゃねえか！」

「……だって私スタミナ無いから、スカイさんみたいにそんな何回も走れないよお」

「じゃあトレーナーからしばかれても良いってことだな」

「……!! ずるいよそれは……」

3月。

次のレースに備えて、スカイとスリープはトレーニングに励んでいるのだが、何かにつけてのんびり屋なスリープは、トレーニングあまりやりたがらない。全くやらないって訳じゃないんだが、どうにもやる気が出ていないようだ。

まあ、その為にスカイを同伴させてトレーニングさせているんだけど、そのスカイもなかなか手を焼いている感じだな……。本番でハマしなけりや良いけど。

「鶴崎トレーナー」

「おう、どうしたムーン」

内心心配しながらトレーニングの様子を見ると、ちょうど自主トレを終えたムーンがやってきた。

「私の次のレースについてなのですが……」

「どうした、何か気付いたことでもあったか？」

「いえ、その……」

いつも理路整然としているムーンにしては、珍しく口籠っている。まあ、理由は俺なんだろうけど。

「海外への遠征のことか？」

「! ……気付いていらしたのなら、最初から仰ってほしいですわ」

「ムーンの性格上、自分の口で言いたいんじゃないかなと思ったただけだよ」

「ズルい返答ですわね。……鶴崎トレーナーの仰る通り、今月末に控

えているドバイでのレースのことで少し」

先月の京都記念を圧勝したムーン、本人はスカイと同じく4月に行われる大阪杯への出走を考えていたようだ。しかし俺がいた世界、史実通りなら次走はドバイターフだったはずだ。実際、スピードよりもパワー型であるムーンなら、海外でのレースの方が合っているのではとも思ったので、出走登録をしたという訳だ。

「まあ、誰だって初めての海外遠征というのは不安になるもんだ。でも俺はお前に勝てる見込みがあるから出走登録をしたんだ。理由は至ってシンプルなもんだよ」

「ですが……私はこの日本でですらGIレースを勝っていません。海外へ行かれたウマ娘といえば、エルコンドルパサーさんや、アグネスデジタルさんなど、日本で活躍された方ばかりではないですか。鶴崎トレーナーのお気持ちは嬉しいですが……私にはどうしても自信が持てませんわ……」

そう言うと、ムーンは俯いてしまった。俺がどれだけ勝てる見込みがあるかと、自信を持っていたとしても、結局走るのはこいつらウマ娘達なんだ。俺の言葉だけでは、確かに自信を持つという方が難しいのかもしれない。それでも、だ。

「ならばムーン、考え方を変えよう」

「考え方、ですか？」

「何故、日本で活躍しないと海外に行つてはダメなんだ？」

「簡単なことです。自国というのはホームグラウンドです。そのホームグラウンドで活躍出来ずに、より体力も精神も使うアウェイの場で活躍出来るとは思えないからですわ」

「でもさ、日本で産まれたけど、海外へ籍を異動させたウマ娘もいるだろ？」

「それは……」

「しかもそれで活躍したウマ娘だって少なくはない。何事にも自分にとって、向き不向きというものは存在する。それでまあ……言い訳じゃないけど、ダメだったとしても得られるものはゼロじゃないと思うぞ。日本では見られないレース展開だって起こりうる。それを身

をもって経験出来るというのは、貴重なものだと思うし」

「……そう、ですわね。申し訳ありません、弱気になりすぎていたみたいです。私、精一杯走って参りますわ」

「元気になったみたいで良かったよ」

内心へソ曲げられないかドキドキだったけど、何とか説得出来て良かった……。しかし……前いた世界でも、サラブレッド達はこういうことを考えたりしていたのだろうか。正直、その日のコンディションとかは多少なりとも分かっていたけど、前々からの感情とかまでは、あまり気が向いていなかったかもしれない……。――

「何とマジックボンバー1着でゴールイン！ 他の有力ウマ娘達を尻目に見事な差し切り勝ちです！」

「道中ですっかり脚を溜めて、ロスのないコーナリングが展開にハマりましたね。まさに好競走とはこのことです」

スリープが出走した500万下のレース。断然の1番人気に推されるも、スリープは2着に敗れた。

「……はあ……はあ……こんなの……くそっ」

他のウマ娘達がウイニングライブの準備に向かう中、未だにコース内で佇むスリープ。その表情は、いつもの眠そうなダルそうな顔ではなく、目の前のターフを悔しそうに睨み付けていた。

「だからスリープのやつ、ちゃんとトレーニングしろって言ったのに……」

俺の隣ではスカイが呆れた表情でスリープを見ている。

「スカイ」

「何だよトレーナー」

「スリープのこと、任せて良いか？」

「任せるって……ライブ見ねえのか？」

「別に見ても良いんだけどな。このレースで、スリープ自身が何を感じたのか、自分自身の言葉で俺に言ってきてほしいなと思ってな」

「なるほどなあ。ま、いいぜ。その代わり今日の飯、ニンジン多めで頼むぜ」

「お安いご用だ」

ここで腐っていくってことはないだろうが、負けて悔しいって感情は、絶対に大切にしたいほうが良い。俺は何度も何度も負けてきた男だからな。その悔しきは、誰よりも知ってるつもりだぞ、スリープ。

「……トレーナー」

「どうしたスリープ、こんな時間に」

時間は21時を回っている。晩ご飯も終わり、今はそれぞれ自由時間となっている。

「……ごめんなさい」

「は？ 急にどうしたんだ」

「……今日のレース、絶対勝てるって油断してた。今までもこうやって負けることがあったけど、今日は……今日だけは凄く悔しかった。何で負けたんだろう、何でトレーニングしなかったんだろう、何で今まで負けたのに何も思わなかったんだろうって。……だから、真面目にレース出来てなかったから、ごめんなさい」

「……その悔しいって気持ちを忘れなければ、お前はもっと強くなれる。その上でちゃんとトレーニングをするのなら、もっと楽しいとも思えてくる。だから、今日のレースの内容については何も言わない。次に活かしてくれるならな」

「……はい」

キツカケ1つで大きく変わるもんだ。スリープにしても、ムーンにしても、その小さなキツカケに気付けたことが大きいと思う。俺はその後押しが出来れば良い。

「だがなスリープ」

「……は、はい」

「何も言わないけれど、何かはさせてもらう」

「……へ？」

「今日から1週間、俺に毎日添い寝してもらう」

「……そ、添い寝?! や、やだよお〜! 睡眠は1人で取るのが1番なんだからさ〜!」

「これに懲りたら、2度とあんなレースをしないことだな」

「……トレーナーのバカ! ちよつと感動したのに!」

「うるせえ！ ほら、大人しく俺の抱き枕になりやがれ！」
「……た、助けてえ〜！」

翌日、お互いに目覚めスッキリでした。